ISSN 0386－4790
第19号　国文学研究資料館報　昭和57年9月

国文学研究資料館報
第19号
昭和57年9月

創立十周年に当って

小山　弘志

国文学研究資料館は昭和四十七年五月に発足、五十二年六月に開館した。本年で設立後十年、開館後五年になる。そこで十月二十九日㈮に記念式典を挙行、三十日㈯には記念講演会を開き、また第六回国際日本文学研究集会を十一月十日㈬より十三日㈯までの四日間、例年よりやや規模の大きな催しにして、いささか記念の意もこめることにした。十一月初旬を中心に所蔵品の特別展示も計画し、また『十年の歩み』を編集中である。

この十年、当館設立の才一の目的である江戸時代末までの国文学関係文献のマイクロフィルムなどによる収集は、公私の所蔵者の協力に支えられて約五万点に達した。これらは長く保存する道を講ずるとともに、所蔵者の諒承の得られたものをひろく研究者の利用に供している。

また、雑誌・紀要類に掲載された論文や単行本などの研究情報を一年ごとに編集して刊行する『国文学年鑑』は、昭和五十五年度の分まで発行した。そしてこれら逐次刊行物の収集は、公私各機関の好意によって漸次充実し、昭和五十五年度の分の『年鑑』採録の論文約六千、その収載誌は月刊も一点と数えて約八百点であるが、そのうちの約七百七十点を所蔵するに至り、多くの人々の閲覧や複写サービスに応じて研究に寄与している。

これら資料の情報は着々と電算機に入力されており、やがてそれによる検索が可能となるであろう。その他、国文学研究への電算機利用について検討を重ねている。

さらに、大学院教育への協力、解題研究を中心とした共同研究、海外の日本文学研究者との交流、講演会・展示による普及活動なども、当館がこの十年間にわたって実施して来たことである。

以上の諸事業は、文化遺産を保存し、研究者一般の便益をはかり、ひろく国文学研究に寄与するという方針に基づく。当館は国文学界の総意が二十余の学会を結集しての要望となって設立されたものであるから、当然のことである。教育職の館員は、各自専攻の研究活動とともに、職員と協力してこの事業を遂行して来た。本年四月、市古前館長のあとを承けた者として、この基本方針を堅持し、一層の発展を期して全体の運営にあたる覚悟である。館外の委員をはじめ、多くの方々の今後ともかわらぬ御支援をお願い申し上げる。

一　目　次　一

創立十周年に当って……小山弘志……1
米国における最近の日本文学研究の動向……ロバート・ブラワー……2
共同研究について……松崎　仁……5
共同研究に参加して……鷲英末雄……6
文庫紹介㉒……7
評議員・委員・調査員・人事異動……8
古典籍所蔵状況調査の結果について……10
文献資料部事業報告……福田秀一……11
研究情報部事業報告……棚町知弥……12
整理閲覧部事業報告……本田康雄……13
共同研究……14
利用者へのお知らせ……15
昭和五十七年度秋季学会開催一覧……16

お知らせ

創立十周年記念特別展示
十月三十日㈯―十一月十三日㈯
（日曜・祝日は休館）於当館
所蔵和古書の代表的なもの及び史料館所蔵古文書資料等

創立十周年記念公開講演会
十月三十日㈯午後一時半より於当館
海外における日本文学　中村真一郎
連歌の今日　金子金治郎

創立十周年記念第六回国際日本文学研究集会
十一月十日㈬―十三日㈯於当館
（参加申込十一月二日まで）

※休館日（閲覧業務を行わない日）の振替　十月二十九日㈮は記念式典を行いますので、臨時休館日とし、定例休館日である十月三十日㈯は開館いたします。

米国における
最近の日本文学研究の動向

ロバート・ブラワー

アメリカにおける、最近の日本文学研究の動向についての大体の私の考えをお話しします。

多くの専門家がいるという点で、日本以外の外国ではアメリカが一番ですが、アメリカの人口二億二千五百万の中で、日本文学専門の人はわずかに六十ないし八十名に限られていると思います。私は六十名以上数えましたが、各々の大学院の学生について詳しくは知らないので、そのことを御了承下さい。

この六十ないし八十名が日本文学専門で日本文学を教えているのですが、中にはあまり研究をしない人もいます。ちっとも活動しない人が、日本にもいるようにどこへ行ってもいるわけです。しかし、全体的に言えば、割合に活躍していると思います。

アメリカの大学の組織では、若い者が、研究してできあがった本や論文を発表しないとクビだということになっています。それが大変な圧力になっているので、現在では研究しない若い学者はまずいないと思います。いるとすれば、そのような人は容赦なく解雇されることになり、次の人が雇われます。アメリカは最近不景気なので、二、三の例外を除いては、各大学は非常に経済的に節約しており、教員の人数もできるだけ減らしています。ですから、日本文学研究の動向の上で悲観的なことですが、今まで日本文学研究機関を置いていなかったところで、新しくそれを設置するようなことはまずないでしょうし、この状態は当分続くと思います。

アメリカにおいて最も評判のある、文学研究も含めた日本研究をしているのは、ハーバード、コロンビア、ミシガン、イェール、スタンフォード、バークレー、プリンストンの七つの大学だと思います。そのほか、シアトルのワシントン大学も評判になっています。ハワイ大学は学生の数は多いし、シカゴ大学でも日本文学研究があります。

日本文学研究をしようと思う学生が、どこの大学を選ぶかは、大体奨学金の有無で決まります。日本文学研究をやっている大学院の学生のほとんど全員が奨学金をもらっているからです。ですから、奨学金の多い大学の方が優秀であるというか、多くの学生をひきつけることが出来ると言えます。言うまでもなく、その首位にあるのがハーバード大学です。ハーバード大学の卒業生はたくさんの寄付をしますし、日本からも寄付金があります。他大学は、大学院の学生を集める競争をしています。ただ、一番いい学生が、みんなハーバードの大学院にいるという意味ではなく、他の大学にいる学者の魅力や、特定の研究分野でその指導を受けたいといって、その大学を選ぶ優秀な学生も可なりいます。学生に与える奨学金を最も持っているのは、先程の七つか八つの大学です。

不景気のせいで、新しく日本文学教員を公募しているところはほとんどなく、私の知っている限りでは、大学では今年四ケ所だけです。一ケ所はイェールで、今やっている人を解雇するので若い人を探しています し、イリノイも詳しい事情は存じませんが多分同じような理由で、若い人を探していると思います。南カリフォルニア大学やアイオワ大学も探しています。ですから、ある程度は動きがあるんですが、二、三年前と比べてあまり動いていないと言わなければなりません。

日本文学研究において、アメリカで一番人気のある分野は、意外なことではないと思いますが、近代ないし現代文学（明治以後）の小説、散文学で、六十名以上の中の二十二名ぐらいがやっています。最近よく研究されているのは鷗外、漱石です。漱石は依然として魅力があるのですが、鷗外は最近になって数人がとりあげています。おことわりしますが、アメリカでは、二、三人が同じ分野をやっていると、それは一つの動向になっていると見られるわけです。近代文学の人気は以前から続いているのですが、特に若い学者にとって魅力があるようです。それに、近代文学は古典文学よりは比較的はいりやすいんです。勿論、明治も遠くなりましたし、それ以後の文学にも色々の困難な問題はありますが、それでも比較的はいりやすい分野だと思います。

もう一つの意義ある動向としては、驚くべき現象だと思うんですが、能楽研究が最近非常に盛んになったこ

とです。私の知っている範囲では少なくとも十三人で、その中の四、五人が世阿弥の研究をやっているのです。いくら世阿弥でも、これだけの人数がやっていると混んでいる感じですね。今までの動向では、なるべく人のやっていないところをやろうとしていたんですが。

ミシガン大学で去年Ph・D論文を終えたトーマス・ヘアー(Thomas Hare)氏は世阿弥の演劇(Plays)について書きました。ヘアー氏はスタンフォード大学に就職しています。同じスタンフォードに出ているスーザン・マティソフ(Susan Matisoff)教授も、やはり能楽研究をテーマとしていて、世阿弥にも興味を持っています。二人以上が同じ大学で同じ研究分野を持っているのは大変めずらしいことです。

それ以外では、コーネル大学のカレン・ブラゼール(Karen Brazell)教授がいます。最近の注意すべき一つの現象だと思いますが、能楽を謡曲としてばかりでなく、演劇、芸能としての研究をしているわけです。ブラゼール氏は演能の研究をしていますし、ヘアー氏も同様です。ヘアー氏は日本で、謡い、仕舞、鼓や大鼓の指導をそれぞれ受けて、それらのことを理解できるようにと努力しています。

アメリカにおける動向をお話しするときに、カナダを入れないといけないと思います。カナダで日本文学をやっている人はほとんど皆がアメリカ人だからです。それほど多くありませんが、主にオンタリオ州のトロント大学と、西海岸のブリティッシュ・コロンビア大学でやっています。トロント大学のフランク・ホフ(Frank Hoff)教授は演能の研究をしていて、また中世芸能の起源にも非常に興味を持っています。

演能と謡曲の研究ばかりではなく、能楽理論をやっている人もいます。先程のヘアー氏もかなりそれをやっていますし、八十年にミシガン大学でPh・D論文を終えたジャネット・ゴフ(Janet Goff)氏が源氏物語に材料をとった謡曲についての論文を書きました。ゴフ氏の研究で明らかとなったことは、中世において謡曲を書いた作者が、連歌師たちのためにつくられた源氏物語の梗概書や参考書を利用したということです。

それから能楽論に興味を持っている人としてはワシントン州のシアトル市にあるTheater Arts Researchのマーク・ニアマン(Mark Nearman)氏がいます。ニアマン氏は世阿弥の能楽論を主にやっていて、この二、三年の間にMonumenta Nipponicaに二、三の論文を発表しましたが、かなり演劇に理解が深いように思います。

もう一人ウィスコンシン大学のロイヤル・タイラー(Royall Tyler)氏も謡曲の英訳をコーネル大学出版部から二冊出しました。それから、能あるいは中世文学における仏教の象徴主義に興味を持っています。

第三番目には平安文学が盛んで、その中でも相変わらず源氏物語に人気があります。コロンビア大学でサイデンスティッカー教授の指導を受けている優秀な人が二、三人います。アメリカの平安文学をやっている学者が注目しているのは、源氏物語における視点の問題です。その問題についてアマンダ・スティンチカム(Amanda Stinchecum)というコロンビア大学出身の女の方が、一昨年優秀な論文をMonumenta Nipponicaに出しました。

それから、江戸文学が割合に人気があると言えます。少なくとも六、七人やっていると思います。ロバート・ダンリー(Robert Danly)というミシガン大学の助教授が、昨年樋口一葉の研究をイェール大学出版部から出したんですが、一葉が非常に西鶴に影響されたことに気づいて、一葉を踏み石にしてそこから江戸文学に入っていこうとしています。今、西鶴の『世間胸算用』の英訳をやっているところです。他にも、西鶴の研究をしている人が二、三人いると思います。その一人のハーバード大学出身のカリール・カラハン(Caryll Callaghan)氏は最近上智大学出版部から『武家義理物語』の英訳を出しました。

江戸後期の戯作文学、滑稽本などに興味を持っている中ではハーバード大学のハワード・ヒベット(Howard Hibbett)教授が第一位を占めています。それからミシガン大学出身のロバート・ロイトナー(Robert Leutner)氏も戯作文学をやっていて、式亭三馬についてのPh・D論文を終えましたが、今年ハーバード大学出版部から出るはずです。

また、和歌文学を研究している人は四、五人いますから、江戸文学に次いで盛んです。万葉集の研究では、プリンストン大学のイアン・リビー(Ian Levy)さんが、全訳をやっています。第一冊めが、プリンストン大学出版部と東京大学出版会から最

近出ましたが、全部で四冊になります。万葉集の英訳としては一番になると思います。

古今・新古今、それ以後の和歌や和歌史を研究している人では、ハーバード大学のエドウィン・クランストン（Edwin Cranston）教授がいます。クランストン氏は万葉集にも興味を持っていて、「万葉集におけるイメジリー（Imagery）」という論文を Harvard Journal に出しました。古今集の研究はカリフォルニア大学のヘレン・マッカラー（Heren McCullough）教授がやっています。マッカラー氏は研究分野が広く、軍記物語や歴史物語、平安文学の歌物語もやります。和歌にも興味を持って、今は古今集についての本を出すつもりで研究しています。新古今時代の研究は私がやっています。

室町時代の和歌、連歌は、Brigham Younc University のスティーブン・カーター（Steven Carter）氏が研究しています。連歌の研究としては、一昨年 Monumenta Nipponica に『湯山三吟百韻』の英訳を出しましたし、最近同誌に "WAKA in the Age of RENGA" という優秀な論文も出しました。どちらかといえば連歌中心の研究をしていますが、連歌の一番盛んであった室町時代における和歌の研究もやっているわけで、このような研究をしているのは彼一人です。

連歌・俳諧の研究をやっているのは、四、五人います。プリンストン大学のアール・マイナー（Earl Miner）教授は、一昨年『Japanese Linked Poetry』をプリンストン大学出版部から出しました。先程のヘアー氏も修士論文で連歌の英訳をして、それも Monumenta Nipponica に出ました。また、コーネル大学のブラゼール氏は、連歌概論の出ている小西甚一先生の著書『宗祇』の一部分を英訳しました。もう一人はハーバード大学のクリステンセン（Esperanza Romirez-Christensen）氏です。クリステンセン氏は大学院の学生としては連歌に関する知識が豊富です。また、先程のゴフ氏が能楽と連歌論の関係について研究しています。

説話文学は三、四人、軍記物語・歴史物語はマッカラー教授たちのほかに一人か二人やっていると思います。歌舞伎などをやっているのも二、三人、現代演劇は二人、現代短歌が二人、現代詩も二人ほどやっていると思います。

以上が大体の研究の分野や動向ですが、もう一つ注目すべきことは、アメリカではコンフェレンスという、招待形式の臨時会議が盛んになっていることです。誰かが何らかのテーマについて学者や、それに関する論文を集めて、そこで議論しようということですが、そのためには、アメリカは広いのでどこかから授助金がないと開けないのです。そういったスポンサー付きの会議を催す際に、最近で最も授助金を出しているのは Social Science Research Council という財団です。招待によって、自分と同じ興味や専門研究分野を持っている人が集まったり、文学ばかりでなく、例えば日本文化に関する何らかのテーマで文学・歴史学・社会学・美術史といったいろいろの専門研究分野の人が集まったりします。たとえば、去年の八月に「中世日本文化における過去の理想」、過去に対する態度、即ち中世日本文化における平安全盛期の文化の魅力とその影響、このテーマでの会議がありました。参加者は二十名ほどでサンフランシスコで行われましたが、日本文学研究者は四、五人で、他は歴史学者・美術史学者、また日本から招待で参加した学者もいました。それから中国文学の専門家が二人、西洋イタリア・ルネッサンス時代の歴史学者が一人比較文化的立場から大事な貢献をしました。もう一つ、同じく昨夏、サンフランシスコで日本文学論に関する会議がありました。参加者はわずか八人ほどで、ほとんど日本人の学者だったそうです。今年の八月には、「世界における源氏物語」というテーマの会議がインディアナ大学にあるので、アメリカ・日本・ヨーロッパからの参加者は凡そ三十名近くになると思います。要するに、臨時会議というものも、アメリカで一つの意義ある動向となっています。

この他にも色々の言及すべき学者や研究問題がありますが詳細は先程お渡ししましたリストに出ていますから省略しまして、これで一応私の話を終わらせていただきたいと思います。

（ミシガン大学教授）

※（Robert Brower 教授は国際交流基金の招きで来日され、昨年の第五回国際日本文学研究集会にも参加された。本稿は一九八二年一月二十七日、当館においてお話しいたたいたものである。このあと、懇談会が行われ、その席でも大へん興味あるお話をうかがったので、その一部を付記する。）

懇談会より

―評判のある雑誌と学会活動―

次の三つの雑誌があります。

① Harvard Journal of Asiatic Studies（ハーバード大学出版会）

② Monumenta Nipponica（上智大学、年四回）

③ Journal of Asian Studies（アジア研究学会、年四回）

①と②は有名でよい論文が掲載されます。③はアジア研究という広い分野なので、日本文学の論文はめったに出ませんが、書評が広く掲載されます。ただし、紹介が主で評価の厳しさが不足するように思われます。このほか、

④ Journal of Japanese Studies（ワシントン大学、シアトル、年四回）

⑤ Journal of American Oriental Society

⑥ Journal of the Association of Teachers of Japanese　などがあります。

アジア研究学会は会員二、三百人の大きな学会で、毎年三月に大会があり、そのほか地方的な会合もあります。ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）のような日本学だけの学会はありませんが、この学会は分科会に分れ、日本学の分科会がその役割を果しています。オリエント学会の方は古い学会ですが中近東が中心です。日本語教師協会には日本文学研究者もかなり参加していますが、日本語を教える人々の団体ですから日本文学研究者がすべて参加しているとは限りません。（御参考までにその名簿のうち私の知っている範囲で日本文学研究者にチェックをしておきました。）

「社会科学研究会議（Social Science Research Council）」がスポンサーとなる特定テーマのコンフェレンスは随時、当該専攻の研究者の申請にもとづいて開催されます。多分、フォード財団や「米国人文基金（National Endowment for the Humanities）」の資金が財源となっています。日本人も多数参加する時には、国際交流基金（Japan Foundation）が資金を出す場合もあります。その成果は別にホストとなった大学などから出版されるのが普通です。

共同研究について

松崎　仁

このような題で文章を書くことを課せられたのは、わたくしが共同研究委員会の末席につらなって来たためであろうが、共同研究の現場のくわしい実情は知らないにひとしい。そういう立場で物を言うのは大変おこがましいことだが、お許しをいただきたい。

一般に文学研究は共同研究というものになじみにくい。作品・作家の内容に肉迫しようとする研究は、それについて共同の場で討議を重ねたにしても、最後は各個人の主体においてやるほかはない。資料館も共同研究をやらねばならないという「課題」は、どうも自然科学畑の思想が持ちこまれたものらしいが、それと同じようにやれるはずはないのである。わたくしが委員になった時には解題研究が既に発足していたから、当面そうした書誌的研究中心のテーマをやって行くのは、なるほど共同研究のテストケースとして妥当な方法であろうと納得した、というのが正直なところであった。

共同研究になじむテーマは何か。それをさぐり、試みて行くこと自体が、資料館の学界に対する貢献の一つになるだろう――というくらいの、腰を据えた急がぬ構えが必要ではないだろうか。わたくしとしては、共同研究より共同作業の面が勝った、共同作業が有効性を発揮するようなテーマで、資料館の施設が役に立つ分野が試みられるとよいと思う。その意味で今年度発足した「連歌資料のコンピューター処理の研究」に大きな期待を寄せている。

ところで今回研究報告が公刊される俳書解題であるが、この研究グループは解題作業そのものをなかなか開始しなかった。しかしそれは、解題執筆のマニュアル作りに時間をかけて、解題とはいかにあるべきかを考えるという意味の共同研究が行な

第6回国際日本文学研究集会

とき　11月10日(水)～13日(土)

ところ　国文学研究資料館

特別講演

美術品としての日本の書物（K・B・ガードナー）、日本古典文学の翻訳（D・キーン）

招待発表　7件

研究発表　6件

公開講演

文芸としての日記（W・H・マカラ）、藤原道長と『御堂関白記』（山中　裕）

われている結果だと諒解された。こういう仕事はどれほど入念慎重であってもありすぎることはない。だから委員会の席でも、わたくしはそれを評価する発言を一度ならずした記憶がある。もちろん「初雁文庫」の解題も「光丘文庫俳書」の解題も、それ自体が学界に寄与する大きな財産である。しかし、せっかく時間をかけて討議された「解題のためのマニュアル」が、その討議を含んだ形で公刊されていたら、さらに有意義だったと思う。「解題研究」は「解題のための研究」として出発したはずだったからである。

話を一般論に移すと、共同研究の成果を左右する要件に人の組合せの問題がある。普通の形態では、たとえある程度リーダーシップをとる人がいても、全員が研究者として平等の資格において平等の負担をにな うという「建前」のもとに、できるだけ全員の合意によって作業を進めようとするが、こうした相互尊重の精神が、メンバーの作業に対する相互点検をやりにくくする場合が多い。これを防ぐには、各人が批判に対してフランクな、開かれた研究者精神を持つよりほかはないが、それは座して期待すべきことではあるまい。現実的には、構成員から信頼される人物を中心に、相互に心を開き合えるメンバーを組合わせることを、人選の段階で慎重に考えること、さらに大切なのは、中心になる人が最も多くの時間と労力を費すことを覚悟して実行することである。

しかし、これを資料館における共同研究の問題として考えると、たちまち難問が生ずる。中心となる人は館内の人がよいのか、館外の人がよいのか。前者がよいとして、では館内の人にそれだけの時間と労力を割きうる条件があるのか。そもそも共同研究は館主導でなされるべきなのかどうか。館の施設と予算は共同研究へのサービスであって、館内の人はそのための世話人たるべきだという考え方もある。

さらに警戒しなくてはならないのは、官僚的管理方式やその発想が先行することである。『共同研究報告2』によると、当初予定されていなかった旅費が「年度末に近い時点に至って」支出されたことが、「本共同研究の基本方針の上に、大きな変更をもたらす」ことになったという。お役所の会計上の処理が研究計画を規定するという事態の一例でなければ幸である。研究計画の立案にあたり、研究費の問題が重い因子となるのは、ことに共同作業の場合やむを得ぬこととは重々承知しているが、近頃は一般に、研究費への配慮が先行しすぎるようにも思えるだけに、言わずもがなの一言を付け加える次第である。

（共同研究委員会委員、立教大学文学部教授）

共同研究に参加して

雲英　末雄

国文学研究資料館の共同研究で、昭和五三年度から酒田の光丘文庫の俳書解題をやっているという話はきいていたが、翌年になってわたしはそのメンバーに加わらないかとの誘いをうけた。光丘文庫といえば、酒田で殿様よりも権勢を誇ったといわれる本間家、その本間家の三代目四郎三郎光丘の文庫で、西鶴本の二、三や、俳書の『軒端の独活』『是天道』などの稀覯本、あるいは『七百五十韻』『一橋』等の善本があることぐらいは知っていた。もとより俳諧は専門分野だし、俳書に触れるのが何よりうれしく有難いので、承諾の返事をした。

はじめて共同研究の会議に出席してびっくりした。前年度の確認とのことだが、解題とは何ぞやということで喧喧諤諤、四、五時間討議してなおつきなかった。聞けば前年度では、書物とは何ぞや、古典とは云々といったところから始まって多くの時間を割いたという。議長は名うての論理家松田修氏。その幾度にも及ぶ討論の結果は、解題執筆要項としてまとめられ、ちかぢか刊行される『共同研究報告2』の「凡例」に載っているので、それを御覧いただきたい。ここで一つ問題点をあげるなら、「見出し書名」の採り方を「内題」によって決めることになったが、わたし個人としてはこれに反対で、あくまで「外題」（題簽）によるべきだという考えを今だに捨てきれずにいる。

ところで本解題の出発時においては、資料館で撮影した紙焼写真によって解題を実施する方針であった。しかし調査費が出るということで、途中から書誌調査に酒田に出かけられるようになった。今まで調査員が記載したカードによって書誌を転記していたのだが、不確実なことが多

く、それが自分でたしかめられることは有難いことだった。しかし問題も多い。たとえば、表紙の色や模様だが、これがほとんど統一がとれていない。模様は資料館で先般図版入りの資料が出たので有難いが、表紙の色については誠に困るのだ。たとえば紺・藍・縹・水色等をどう区別すればよいかだが、その基準はあいまいで人によって微妙に異なっている。それゆえある程度の統一をとるためにも、資料館の仕事として基準となる色のサンプルを是非とも作成していただきたいものと思う。さて次に実際に光丘文庫本の書誌調査が可能になると、今度は解題本の位置づけの必要上、諸本調査が必要となってくる。これについてもなるべく徹底的に調べるべきだとする意見から、光丘文庫本を主とするだけで、余裕があれば他本も調査すればよいとする意見まで出て、かなりな幅がみられた。これは最終的に担当した個人の責任に任せ、情報は出来うる限り互いに知らせるということで落ちついた。しかし、かなりな問題が残ったこともたしかである。

二百数十点の俳書の解題執筆は、尾形仂・森川昭・中野沙恵・加藤定彦・谷地快一・池田俊朗の諸氏、それにわたしの館外研究員七名によって行なわれた。最終年度の五六年度からは館内では担当が松田氏から棚町知弥氏に替わり、まとめの作業が急ピッチで進められた。最終的な解題原稿の統一や調整の作業は加藤氏とわたしが担当したが、原稿を読みながら、それぞれの解題者の個性が、さまざまなかたちであらわれているのは興味深かった。しかし、それゆえに統一や調整となると、なかなかむつかしいところが生じた。それに今回の共同研究では、とくに執筆要項が、数度にわたって試行錯誤をくり返しながら改訂され、そのたびに執筆者の確認をとったのだが、各人でなお徹底していないところがあり、それが最後まで多少の統一のみだれとなって残ったように思われる。ともあれ俳書解題の共同研究はまとめられた。これをステップとして、さらに研究の発展を願いたいと思う。最後になったが、光丘文庫の方々によるあたたかい配慮は、あの酒田の銘酒初孫のうまさとともにわすれがたいものがある。心より御礼申し上げたい。

（共同研究員・早稲田大学文学部助教授）

文庫紹介②

彦根市立図書館「琴堂文庫」

「琴堂文庫」（一九、八一一冊、内和漢書一八、〇〇九冊）は、故井伊直忠（なおただ）氏の集書であり、氏の没後昭和二五年に長男の直愛（なおちか）氏により彦根市立図書館に寄贈され、直忠氏の号をとって「琴堂文庫」と名付けられた。直忠氏は、旧彦根藩主である井伊家の第一五代当主で、明治一四年五月に生まれ、昭和二二年四月に没した。享年六七歳であった。伯爵家当主として趣味の世界に生きた人らしく、書籍の収集も趣味の一つであったようだ。

一個人の集書という性格上、同文庫の内容も直忠氏の嗜好を顕著に反映している。最も多くかつ貴重な書籍は、易学・真言密教関係などであり、今日も閲覧希望者が多いそうである。また、能・狂言関係の本も一まとまりあって特色の一つとなっている。直忠氏は名人と謳われた初代梅若万三郎に師事しており、かなり能に傾倒していたようである。それにともなって関係する書籍を収集したらしく、謡本・囃子の手付の類が特に多い。

国文学研究資料館では、彦根市立図書館の協力を得て、昭和五六年度から、まず能・狂言関係書目一〇八点の調査を行った。その折の成果の一部は、橋本朝生氏「彦根市立図書館琴堂文庫蔵狂言関係書目解題稿」（国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』第三号）として報告されている。五七年度は、真言密教関係書目の調査を引き続き行ない、それと並行して、五六年度既調査分の能・狂言関係書目の内、九九点をマイクロフィルムにより収集する予定である。

なお、同文庫は一般に公開されており、目録は手書きの台帳が用意されている。

彦根市立図書館
場所　〒552　滋賀県彦根市尾末町八番一号
電話　〇七四九―二二―〇六四九

（文献資料部　小林健二）

国文学研究資料館評議員名簿

任期　昭和五七年七月一日～五九年六月三〇日

阿部秋生　実践女子大学文学部教授　東京大学名誉教授
石井良助　創価大学法学部教授　東京大学名誉教授
井上光貞　国立歴史民俗博物館長
伊地知鐵男　元早稲田大学文学部教授
臼田甚五郎　国学院大学文学部教授
小田切進　立教大学文学部教授　日本近代文学館理事長
加藤周一　上智大学外国語学部教授
久曽神昇　愛知大学長　愛知大学理事長
児玉幸多　学習院大学名誉教授
小葉田淳　京都大学名誉教授
斎藤正　東京国立博物館長
佐藤喜代治　フェリス女学院大学文学部教授　東北大学名誉教授
谷山茂　大阪市立大学名誉教授　京都女子大学名誉教授
野間光辰　皇学館大学文学部教授　京都大学名誉教授
林大　国立国語研究所名誉所員
古島敏雄　専修大学経済学部教授　東京大学名誉教授
宝月圭吾　東京大学名誉教授
松尾聰　学習院大学名誉教授
松田智雄　図書館情報大学長　東京大学名誉教授
山本達郎　東京大学名誉教授

国文学研究資料館運営協議員名簿

任期　昭和五七年八月一日～昭和五九年七月三一日

秋山虔　東京大学文学部教授
今井源衛　梅光女学院大学文学部教授　九州大学名誉教授
大野瑞男　国文学研究資料館史料館教授
小林清治　福島大学教育学部教授
小山弘志　国文学研究資料館長
佐竹昭廣　京都大学文学部教授
神保五彌　早稲田大学文学部教授
棚町知弥　国文学研究資料館研究情報部長
長谷川強　国文学研究資料館文献資料部教授
秀村選三　九州大学経済学部教授
尾藤正英　東京大学文学部教授
福田秀一　国文学研究資料館文献資料部長
藤村潤一郎　国文学研究資料館史料館教授
本田康雄　国文学研究資料館整理閲覧部長
松本隆信　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長
水谷静夫　東京女子大学文理学部教授
村上學　国文学研究資料館文献資料部教授
安澤秀一　国文学研究資料館史料館教授
山中光一　国文学研究資料館研究情報部教授

昭和五七年度

国文学文献資料収集計画委員会委員

任期　昭和五七年四月一日～昭和五八年三月三一日

今井源衛　梅光女学院大学文学部教授
大曽根章介　中央大学文学部教授
尾形仂　成城大学文芸学部教授
梶原正昭　早稲田大学教育学部教授
片野達郎　東北大学教養部教授
金井寅之助　松陰女子学院大学文学部教授
鈴木勝忠　岐阜大学教育学部教授
田中稔　国立歴史民俗博物館教授
松尾靖秋　工学院大学一般教育部教授
山本信吉　文化庁文化財保護部美術工芸課長

昭和五七年度

文献目録委員会委員

任期　昭和五七年四月一日～昭和五八年三月三一日

浅井清　お茶の水女子大学文教育学部教授
大矢武師　静岡大学教育学部教授
久保田淳　東京大学文学部助教授
久保田孝之　立教大学文学部助教授
小島孝之　東京学芸大学教育学部助教授
小町谷照彦　昭和女子大学文学部助教授
杉本邦子　青山学院大学文学部教授
曾倉岑
浜野卓也　明治大学文学部教授
原道生　東京大学教養学部教授
古田東朔

昭和五七年度

情報検索委員会委員

任期　昭和五七年四月一日～昭和五八年三月三一日

稲岡耕二　東京大学教養学部教授
杉田繁治　国立民族学博物館研究部第五研究部助教授
照井武彦　国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授
西村恕彦　東京農工大学工学部教授
堀内秀晃　東京医科歯科大学教養部教授
水谷静夫　東京女子大学文理学部教授
山本毅雄　図書館情報大学図書館情報学部教授

昭和五七年度

国文学文献資料調査員

任期　昭和五七年四月一日～昭和五八年三月三一日

〔北海道・東北〕

伊藤敬　藤女子短期大学教授
神山重彦　山形大学教養部講師
佐藤稔　秋田大学教育学部助教授
鈴木則郎　東北大学文学部助教授
豊島秀範　弘前学院大学文学部講師
名子喜久雄　山形大学教育学部講師
廣瀬朝光　岩手大学人文社会科学部教授
松野陽一　東北大学教養部教授

〔関東〕

秋谷治　一橋大学経済学部講師
浅見和彦　成蹊大学文学部助教授
板谷徹　早稲田大学演劇博物館助手
岡本隆雄　群馬県立女子大学文学部助教授
川村晃生　慶應義塾大学文学部助教授
斎藤彰　昭和女子大学短期大学部講師
佐藤圀久　群馬県立女子大学文学部助教授
清水宥聖　大正大学文学部講師（非）
棚橋正博　帝京大学文学部講師
千葉義孝　関東学院女子短期大学助教授
月本雅幸　茨城大学人文学部講師
土井洋一　学習院大学文学部教授
徳田和夫　学習院女子短期大学助教授
中山尚夫　東洋大学文学部助手
延廣眞治　東京大学教養学部助教授
平田喜信　横浜国立大学教育学部助教授
宮本瑞夫　立教女学院短期大学助教授
武藤元昭　青山学院大学文学部助教授
和田英道　跡見学園女子大学文学部助教授

〔中部〕

木越治　富山大学教養部助教授
櫻井治男　皇学館大学神道研究所講師
佐藤彰　静岡女子短期大学教授
沢井耐三　愛知大学教養部助教授
田中喜美春　岐阜大学教育学部助教授
長友千代治　愛知県立大学文学部助教授
中哲裕　長岡技術科学大学工学部助教授
西村聡　金沢大学文学部助手
服部仁　同朋大学文学部講師
早川厚一　名古屋学院大学経済学部講師
樋口芳麻呂　愛知教育大学教育学部教授
廣岡義隆　三重大学教育学部助教授
古屋彰　金沢大学文学部助教授
宮崎荘平　新潟大学人文学部助教授
安田文吉　南山大学文学部助教授
和田博通　山梨大学教育学部講師

〔近畿〕

阿部泰郎　元興寺文化財研究所研究員
井上博嗣　京都女子大学文学部教授
梅谷繁樹　園田学園女子大学文学部助教授
岡田彰子　大阪青山短期大学講師
金光洋三　大阪女子大学芸学部助教授
加美　宏　甲南女子大学文学部教授
黒田　彰　関西大学文学部講師(非)
笹川祥生　京都府立大学女子短期大学部助教授
櫻井武次郎　親和女子大学文学部教授
島崎　健　京都大学教養部助教授
島津忠夫　大阪大学教養部教授
須山章信　帝塚山短期大学助教授
竹下　豊　大阪女子大学芸学部講師
田中　登　帝塚山短期大学助教授
鶴崎裕雄　帝塚山学院短期大学助教授
仁尾雅信　天理大学文学部講師
廣田哲通　大阪女子大学芸学部講師
福嶋昭治　園田学園女子大学文学部助教授
藤田真一　追手門学院大学文学部講師

〔中国・四国〕

粕谷宏紀　高知大学教育学部教授
熊本守雄　山口女子大学文学部教授
佐藤恒雄　香川大学教育学部教授
松原一義　四国女子大学文学部助教授
松原秀明　金刀比羅宮図書館嘱託
美山　靖　愛媛大学法文学部教授
湯之上早苗　広島文教女子大学文学部教授
渡辺憲治　梅光女学院大学短期大学部講師

〔九　州〕

今井正之助　長崎大学教育学部講師
江口正弘　熊本女子大学文学部教授
小川幸三　熊本短期大学助教授
河北　靖　北九州大学文学部講師
竹原崇雄　熊本女子大学文学部助教授
田中道雄　佐賀大学教養部教授
中野三敏　九州大学文学部教授
笠　榮治　福岡教育大学教育学部教授

〔文献資料特別調査員〕

荒木　尚　熊本大学文学部教授
伊藤正義　大阪市立大学文学部教授
石川　了　大妻女子大学文学部講師
稲葉二柄　香川大学教育学部助教授
表　章　法政大学文学部教授
景山正隆　東洋大学文学部教授
片野達郎　東北大学教養部教授
金沢規雄　宮城教育大学教育学部教授
鎌倉恵子　明昭学園岩倉高等学校講師(非)
阪口和子　羽衣学園短期大学助教授
名和　修　(財)陽明文庫主事
米倉利昭　佐賀大学教育学部教授

昭和五七年度

国際日本文学研究集会委員会委員

任期　昭和五七年四月一日～昭和五八年三月三一日

池田　重　千葉大学教育学部教授
井本農一　実践女子大学文学部教授
臼田甚五郎　国学院大学文学部教授
長谷川　泉　学習院大学講師(非)

任期昭和五七年七月一日～昭和五八年一二月三一日

ドナルド・キーン　コロンビア大学教授

昭和五七年度

共同研究委員会委員

任期　昭和五七年四月一日～昭和五八年三月三一日

秋山　虔　東京大学文学部教授
稲賀敬二　広島大学文学部教授
島津忠夫　大阪大学教養部教授
神保五彌　早稲田大学文学部教授
松崎　仁　立教大学文学部教授

昭和五七年度

古典籍総合目録委員会委員

任期　昭和五六年四月一日～昭和五八年三月三一日

乙骨達夫　国立国会図書館収集整理部主任司書
菊地勇次郎　大正大学文学部教授
黒住　武　東京工業大学附属図書館事務部長
堤　精二　お茶の水女子大学文教育学部教授
森川　彰　関西大学附属図書館運営課長

昭和五七年度

共同研究員

任期　昭和五七年六月一日～昭和五八年三月三一日

今西　実　天理大学文学部教授
奥田　勲　宇都宮大学教育学部教授
清登典子　成蹊大学文学部講師(非)
島津忠夫　大阪大学教養部教授

任期　昭和五七年七月一日～昭和五八年三月三一日

岩下紀之　愛知淑徳大学講師
岸田依子　吉祥女子高等学校講師(非)
沢井耐三　愛知大学教養部助教授
鶴崎裕雄　帝塚山学院短期大学助教授
渡辺憲司　梅光女学院大学短期大学部講師

任期　昭和五七年八月一日～昭和五七年十二月三一日

池田尚隆　東京大学文学部助手
山中　裕　関東学院大学文学部教授

※各委員会等の館内委員は省略

人事異動

(昭和五七年四月～昭和五七年七月)

(昇　任)　昭和五七年四月一日付

文部教官(国文学研究資料館長)　小山弘志
(研究情報部長より)

(採　用)　昭和五七年四月一日付

文部教官(整理閲覧部助手)　浅井直子

(転　入)　昭和五七年四月一日付

文部教官(文献資料部教授)　長谷川　強
(埼玉大学より)

文部教官(研究情報部助教授)　桑野敬仁
(東京大学より)

(転　出)　昭和五七年四月一日付

文部教官(研究情報部助教授)　石塚英弘
(図書館情報大学へ出向)

(辞　職)　昭和五七年四月一日付

文部教官(国文学研究資料館長)　市古貞次

(客員教授)昭和五七年四月一日～昭和五八年三月三一日

文献資料部　山田昭全
(大正大学より)

(併　任)　昭和五七年四月一日付

研究情報部長　棚町知弥
文部教官(文献資料部助教授)　米谷巌
(広島大学より)

古典籍所蔵状況調査の結果について

整理閲覧室

古典籍総合目録作成事業は、国初から慶応四年までに日本人の著わした文献の総合所在目録を作成し、それを維持・管理する事業である。事業の概要については、館報一五号(昭和五十五年九月)で報告したので、そちらによっていただくとして、ここではその後実施した古典籍所蔵状況調査とその結果について報告する。

古典籍所蔵状況調査は、総合目録作成にあたって基本となるべき次の2点についての情報を得るために実施した。その一は、古典籍を所蔵する図書館・文庫の把握および所蔵点数の推計であり、その二は、古典籍を収載した目録の作成状況の把握である。調査対象は国内の図書館・文庫四、〇四六カ所(大学内の部局図書館等も別々に数えた)で、『日本の図書館』(一九八一)、『歴史資料保存機関総覧』などを参考として選んだが、別に当館で把握できた館については、調査は行なわず、その状況を調査結果に含めた。調査はアンケート形式によった。

調査の回収状況および回答の概要は表1のとおりであった。調査事項の内、目録作成状況についての集計結果は表2のとおりであった。回答があった館については、かなりのものについてすでに何らかの形で目録が作成されている。

今回の調査は、原則として個人所蔵者を対象としなかったが、一方、文献の所蔵機関は、主題分野、種類、大きさをとわずできる限り網らするよう努めた(美術館等は一部網らできなかった)。古典籍を所蔵しない館も相当数調査に含まれていることを考えに入れると、五〇%の回収率は比較的高いものと思われる。従って、今回の調査によって、図書館・文庫の古典籍所蔵状況がある程度把握できたものと考えられよう。古典籍総合目録作成事業で当面対象としている和古書については、少なくとも一一五万点以上の資料が存在すること、国書総目録刊行終了後(昭和四七年)に目録が作成されたものが、約二九万点、その内、冊子体等比較的データの収集が容易なものが約一七万点あることがわかり、同時にコレクション、目録の名称その他の情報が把握できた。

終りに、多くの貴重な古典籍が今日まで保存されてきたのは、各方面の所蔵者が絶えざる御努力をはらってこられた結果であり、その御努力に感謝するとともに、今回の調査にあたってていねいな御回答を下さり、あるいは目録、文庫の沿革等の貴重な資料を御寄贈いただいたことに厚く御礼を申し上げます。今後、調査結果を有効に生かしながら事業を進めていくつもりです。所蔵者の皆様の御協力をお願いいたします。

表1　古典籍所蔵状況調査回収状況及び回答概要

所蔵者種別		発送数	回答数	回収率(%)	和古書・文書を所蔵しない図書館文庫数	和古書を所蔵する図書館・文庫			文書を所蔵する図書館・文庫			古典籍を所蔵するが、和古書・文書の別及び点数が不明	
						図書館・文庫数	コレクション数*2	所蔵点数*3	図書館・文庫数	コレクション数*2	所蔵点数	図書館・文庫数	コレクション数
国立国会図書館及び支部図書館		36	28	77.7	24	4	14	106,709	1	3	10,900	1	1
大学図書館*1	国立	339	266	78.4	134	120	201	240,511	54	147	470,030	12	21
	公立	108	65	60	24	32	46	22,714	13	23	12,400	6	6
	私立	807	466	57.7	327	132	247	256,326	38	78	275,031	6	7
	計	1,254	797	63.5	485	284	494	519,551	105	248	757,461	24	34
公共図書館		1,335	681	51	470	147	290	249,742	114	241	397,583	25	36
文庫・博物館・その他		1,475	535	36.3	261	174	266	278,016	203	333	1,021,849	31	33
総計		4,046	2,041	50.4	1,240	609	1,064	1,154,018	423	825	2,187,793	81	104

*1　短大、一部の高専・高校を含む。又、大学内の部局図書館は別々に数えた。
*2　一般図書中のものは、一般図書を1コレクションとして数えた。
*3　調査では所蔵点数及び冊数を調べた。冊数しか回答がなかったものについては、冊数から点数を推定した。

表2　目録作成状況についての集計結果

調査事項と回答内容	和古書所蔵者について		古文書所蔵者について	
	該当コレクション数	該当コレクションの資料点数	該当コレクション数	該当コレクションの資料点数
I　整理状況は次のうちどれですか？				
1. 整理済	731	922,421	562	1,374,912
a. 昭和35年以前	233	496,208	117	222,643
b. 昭和35年～47年	163	120,817	126	227,355
c. 昭和47年以後	219	185,572	234	629,504
d. 不明	18	21,483	12	21,150
回答なし	98	98,341	73	274,260
2. 現在整理中	190	132,976	167	745,786
3. 未整理	106	51,890	71	61,192
4. その他（そのつど整理）	19	30,106	8	1,374
回答なし	18	16,625	17	4,529
II　冊子体になった目録・リスト等がある場合、コレクションはどのように収められていますか？				
1. コレクションで独立した目録・リスト類がある。	429	616,511	420	1,198,184
2. 一般図書目録に含まれている。	128	241,367	84	213,999
3. 展示目録等、部分的なものがある。	27	48,158	24	26,377
4. その他	15	7,098	20	38,141
5. 2種以上の目録に収載	22	35,844	17	87,768
回答なし	443	205,040	260	623,324
III　冊子体の目録・リストがない場合、お持ちの目録についてお教え下さい。				
1. コレクションで独立したカード目録がある。	110	108,886	80	279,102
2. 一般の所蔵目録中に混排されたカード目録がある。	212	180,691	67	189,017
3. その他	10	6,490	16	11,212
回答なし	732	857,951	662	1,708,462

文献資料部事業報告

福田　秀一

他の記事でも書かれるかと思うが、国文学研究資料館は本年五月に創立十周年を迎えた。国文学文献資料の調査研究及び収集を任務とする文献資料部は、その間に種々の試練を体験したが、各方面の御理解・御協力のお蔭で、近年は一応軌道に乗った歩みを続けている。

それにしても、調査・収集の点数から言えば、恐らくは六、七十万点に上るであろうと言われる国文学関係作品伝本のようやく十分の一を一応手がけただけであり、正に百年の計の十年が終っただけであって、残る九十年あるいはそれ以上へ向って、調査・収集を一層推進すべく相変らぬ御支援をお願いする次第である。

次に恒例に従い、本年二月から七月までに当部で行なった主な事業を、日時を追って報告する。

昭和五十六年度第二回国文学文献資料収集計画委員会の開催

三月二日、当館で開催、議事は次の如くである。

(一)昭和五十六年度文献資料調査収集概況について

当部より資料に基づき、調査は目標・計画を上回って実行できたが、それは文庫の事情等によって急遽可能になったものがあることやCカードが予想より多かったためであること、収集はほぼ計画通りの達成を見たが、個人の好意により計画外のものもあること、海外収集は初年度のこと故手間どり気味であるが発注済のものがいくつかあることなどを報告して、了承された。

(二)昭和五十七年度文献資料調査収集計画について

当部より資料に基づき、当日現在での計画を説明して、若干の文庫の実情等につき情報や意見の交換を行なった後、承認された。

(三)その他

所蔵者へのアプローチの方法その他について意見の交換を行なった。また、当館が収集した資料の利用の便宜について、東京に近い研究者と遠い人との間の便益の格差を解消するよう、何らかの方策を考える必要があるとの指摘があった。

資料利用サービスに関する懇談会（仮称）

前記収集計画委員会の議事の(三)にも出された、当館の資料の中で収集成果（主として紙焼写真）の利用便宜の地域格差については、かねて当館でも問題を感じていたが、三月三十一日当館に、調査員・収集計画委員その他の方々を各地区二名参集願い、この件に関する問題点の確認ならびに意見の交換を行なった。これは必ずしも当部の事業ではなく全館的な対応であるが、参加願ったメンバーの関係その他から便宜ここに記す。

「調査研究報告」第三号の刊行

当部における五十六年度の調査研究・収集の成果の報告書として年度末に刊行した。なお今号から印刷部数を若干増し、業務遂行の理解と協力を乞うべく各大学の国文学研究室（又はそれに準ずるもの）へも寄贈した（才一・二号は部数の関係で国文系の大学院を有するところのみ）が、既刊号は残部がないことを了承されたい。

昭和五十七年度国文学文献資料収集計画委員ならびに調査員の委嘱

これについては、例年通りの方針（収集計画委員は半数交代、調査員は六地区計約八十名、ほかに必要に応じ若干の特別調査員）で、別項名簿の方々を委嘱し、特別調査員（任期は必要に応じて個々に定める）以外は四月一日付で発令された。

昭和五十七年度第一回国文学文献資料収集計画委員会の開催

五月二十日、当館で開催、委員会規程により松尾靖秋委員を委員長に選出した後、次のような議事があった。

(一)昭和五十六年度文献資料調査収集結果について

当部より資料に基づき、本年三月末で集計した標記の結果として、調査は五六箇所九、一二六点（うちCカード一、四二八点）、収集は既製マイクロフィッシュ（静嘉堂文庫物語文学書集成第二編）を含めて二八箇所五、七五二点を、それぞれ達成したことを報告し、了承された。なお、それらの具体的な所蔵者（文庫）名・点数等は紙幅の関係で割愛し、『調査研究報告』第四号に表示の予定である。

(二)昭和五十七年度文献資料調査収集計画について

これも当部より資料に基づき、去る三月二日の委員会で承認された内容にその後の事態によって若干の修正を加えたほか、例年の通り多少の余裕を見込んで、調査は五七箇所で七、八四五点を、収集は国内三五箇所で六、一三一点のほか、海外でルール大学ボッフム以下五箇所を計画していることを報告して、承認された。また、海外収集の進行状況につき具体的に報

告して了承を得るとともに、情報の提供等につき一層の協力を乞うた。

(三)昭和五十八年度以降の文献資料調査収集の方針について

当部より参考資料を提示して、創設後十年を経た今日、当初の目標を思い起こすとともに、現在当面しているいくつかの問題、例えば海外調査の実現法、調査収集対象文庫の拡大法、他機関との連繋協力態勢の立て方、調査収集成果の学界や地元への有効な還元法その他について自由討議を願い、意見交換を行なった。また、収集に際して低廉簡便な電子複写を考えてはとの意見も出たが、資料の保存と利用という当館設置の趣旨と原資料保存（極力損傷を与えない）の立場とから、電子複写の方式は採らないことを確認した。

国文学文献資料調査員会議（総会）の開催

五月二十五日、当館で開催、例年通り前週の収集計画委員会で承認された本年度の文献資料調査収集計画とその実施の方法を中心に討議を行ない、あわせて調査要領の説明が行なわれた。また地区別あるいは文庫別に分担調査員と当部との間で、計画の実行につき具体的な打合せをも行なった。それらの計画はその後逐次実行に移され、七月十七日現在で調査計画件数（延べ）は一四九件に上っている。

同地区別会議の開催

総会の翌日、当館に各地区の調査員二名に参集願い、主として収集成果の利用について、前掲の資料利用サービスに関する懇談会（仮称）を受け、いわゆる中央地方便益格差の問題につき意見交換を行なった。これも前回の懇談会と同様必ずしも当部の所管ではないが、一応調査員地区別会議の名を付したので、ここに記しておく。

研究情報部事業報告

棚町　知弥

研究情報部の事業も十年を経て、目録の作成・年鑑の編集のほか、当初からの課題であった昭和三十七年以前の研究文献の収集と目録作成、情報検索のオンライン化も一応の目途がつくまでになった。引続き、第二段階として、国際活動の強化と、情報処理のリアルタイム化の方向へ向けて踏み出してゆきたい。

情報室

当館の創立十周年記念行事の一環として、本年十一月に行う第六回国際日本文学研究集会は、従来よりやや大きな規模で実施したいというのがかねてからの希望であった。幸い、英国図書館のK・B・ガードナー氏が国際交流基金の招きで参加され、D・キーン氏とともに講演されるのをはじめ、七名の海外の研究者の方々が招待に応じられたので、従来と同様な公募による研究発表も含め、別掲のようにプログラムを四日間（従来は2日）に拡大して準備を進めている。

このほか、今後国際的な活動を一層強めるという方針にもとづいて、①海外の日本文学研究機関一一八、研究者二六八名にアンケートをお送りし、研究者ならびに発表文献についての情報収集に御協力いただいている。

②本年一月ミシガン大学ブラワー教授にお話しいただいた「米国における最近の日本文学研究の動向」は本号に掲載したが、その後も同様の紹介を行う計画であり、すでに京畿大学金孝子教授から「韓国における日本文学研究」の原稿を戴いており、次号掲載の予定である。

③当館を海外に紹介する英文リーフレットも、館内の協力を得て改訂作業中である。

もちろん海外情報だけでなく、国文学年鑑のための新聞情報の収集等の事業は引きつづき進めている。

編集室

編集室では、三月末に『国文学年鑑』の昭和五五年版と『国文学研究資料館紀要』第八号とを無事刊行し了えて、現在は昭和五六年版年鑑の作成を進めていると共に、紀要第九号の編集にも取り掛っている。また、継続中の昭和三七年以前文献目録作成の事業は五ケ年計画の第四年次に入り、既に集積した約三六〇〇〇件のデータを順次コンピュータに入力・校正する一方で、なお目録の完璧を期して最後の資料収集を行っている所である。

情報処理室

本年三月に、五五、五六の両年にわたって開発してきた汎用割付編集プログラムについて、報告書をまとめ刊行した（国文学研究資料館報告9号、「編集ソフトウェア」）。また科研費によって、五五、五六両年にわたって研究開発をすすめてきた「国文学語彙検索システム及び索引誌の

作成に関する研究」(研究代表者市古貞次、課題番号五八一〇〇九)が、一応終了したので、報告書をまとめ刊行した。

昨年来懸案となっていた館内の電算機専門委員会(仮称)が、まもなく発足する見込である。現在すでに準備会として、四回の会合をかさね、具体的な検討を行っている。

また九月末には、漢字端末二台、ディスク400MB、通信回線制御装置一セットの増設を行う。これに伴い、紙テープ関係の機器を撤去する。

なお、宮澤彰助教授は、五六年度の文部省在外研究員に選ばれ、三月末に出発し、英国及び米国を中心に研修を続けていたが、九月末に帰国の予定である。また石塚英弘助教授は、四月一日付で図書館情報大学助教授(図書館情報学部)として転出した。

整理閲覧部事業報告

本田　康雄

昭和五十六年度は整理閲覧室、参考室ともに順調に業務を進めることができた上に、それぞれに新しい成果を得ることができた。整理閲覧室ではかねて準備を進めてきた当館所蔵和古書目録が完成し、関係図書館・研究室等へ配布した。これによって、当館所蔵の文献資料(マイクロ資料と写本・版本)のすべてを利用するための冊子目録が完備したことになり、当館利用の一助となることを願っている。

ところで、東京以外の各地域でも公開講演会を行う最初の試みとして、昨年十一月に京都で開催したが、ひきつづいて本年六月には福岡でも開催した。年三回の公開講演会の内一回は東京以外の土地で開催する方式が定着しつつある。

(一)整理閲覧室

五十六年度は、受入・整理・閲覧どの業務も定着し順調であった。所蔵資料は着実に増加・充実しつつあるし、同時に利用のための目録類も、マイクロ資料目録・逐次刊行物目録に加えて和古書目録を作成・刊行することができた。利用面でも、閲覧利用者の増加・定着、相互協力サービスの増加など拡大しつつある。一方、新しい事業である古典籍総合目録作成事業は、基本的な方向を模索しつつも事業の具体的な形ができあがりつつある。以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務。昭和五十六年度は、マイクロ資料(ロールフィルム一、一四九リール、紙焼写真本五、〇六四冊)、図書(五、五九四冊)、逐次刊行物(一、七五〇誌)、雑誌製本(五八〇冊)その他の資料を受入れた。その結果、全蔵書は、収集マイクロ資料(ロールフィルム一〇、九七四リール、マイクロフィッシュ一〇、〇〇八枚、紙焼写真本二二、三七三冊)、原本一四、五〇〇冊、活字本三五、四五八冊、逐次刊行物二、四五九誌等となった。また、『逐次刊行物目録一九八二年』を例年どおり刊行した。

現在、久松潜一氏の旧蔵書の寄託を受けているが、今回さらに追加して二七点の寄託を受けた。また、武者小路実光氏よりも六点の寄託を受けた。共に貴重な資料であり、現在整理をいそいでいる。

(2)古典籍総合目録作成事業。全国の図書館・文庫等における古典籍の所蔵状況を把握するため、所蔵点数、目録の有無等についてアンケート調査を実施した。この結果、全国六〇九機関(一、〇六四コレクション)に約一一五万点の古典籍(和古書)が所蔵されていることが明きらかとなった。この結果については、この号の「古典籍所蔵状況調査の結果について」に概略を報告した。古典籍書誌データ、所在データの収集は継続的に行っており、五十六年度末で約三万件に達した。所蔵者および所蔵目録に関するデータも、調査結果を含めてほぼ整理が終った。一方、古典籍総合目録専門委員会では、総合目録の構成、データ項目等についての仕様がほぼかたまった。

(3)整理業務。一月に『マイクロ資料目録一九八一年』、三月に『和古書目録一九七二―一九八一』が刊行された。『和古書目録』は、当館で初めての原本(写本・版本)の目録で、今後は『マイクロ資料目録』同様、毎年一冊ずつ刊行したい。マイクロ資料の整理は、順調に進んでおり、一九八二年版作成のため、五、六〇〇件のデータ入力を行った(七月一日現在)。また、図書の整理は、受入冊数の増加(前年度比一・六倍)や一月から三月にかけて『和古書目録』作成に力を注いだことにより、若干遅れが出ているが、まもなく正常な状態に復するであろう。

なお、昭和五十六年度貴重書指定小委員会において『太平記音義』(刊)、

『五十番歌合(年中行事歌合)』(写)、『払惑袖中策』(刊)、『続高僧伝』(写)、『落窪物語』(刊)の五点が貴重書に指定されるとともに、福井久蔵氏旧蔵の「諸大名著作コレクション」一三七点が新たに特別コレクションに指定された。

(4)閲覧業務

昭和五十六年度は入館者数が七〇〇〇人近くに達し、前年に比べ三二%増という大幅な伸びを示した。一日平均約二五人である。利用登録者数も累計で七、三六〇人となった。利用件数でも、複写が四三%増、(九、六三〇件)なかでもリーダープリンターは約二倍に増えた。即日サービスのメリットが評価されたものであろう。

一方、相互協力による複写申込件数は約四倍(八一三点)にはね上った。申込機関の数も増え、全国的な広がりをみせている。

開館五年目の昭和五十六年度は、少なくとも以上の統計数字が物語るかぎりでは、国文学分野の全国的資料センター的機能を担う当館の活動基盤が確立された年とみることもできよう。

なお、蔵書点検を例年通り、年度末の一週間に行った。

(5)マイクロ室業務

八戸市立図書館他三十文庫の作業用ネガフィルム九六八リールを作製し、閲覧用ポジフィルム作製は八三九リール行い、五十四年度収集分の加工を始めた。宮城県立図書館伊達文庫他十八文庫の紙焼写真三六〇、八八七枚を作製し、二五一六冊の製本を行った。文献複写サービスでは、撮影十三点、ポジフィルム五十八点を作製している。

(二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と参考開架閲覧室の維持に当たった。また、参考用資料の作成に関しては、『日本文学史参考書目リスト(参考書誌叢刊3)』を刊行した。

国文学の普及業務として、左記のとおり公開講演会、展示を開催した。

●第十六回公開講演会(六月十二日、於福岡国際ホール)

「九州における国文学資料と私」今井源衛氏(梅光女学院大学教授)、「実録研究綱領」中村幸彦氏。

●常設展示

狂歌展(二月八日～四月十七日)

八犬伝とその周辺(五月七日～七月十日)

昨夏の第四回夏期公開講演会の筆録集である『近世の小説(国文学研究資料館講演集3)』を刊行した。

なお、四月一日付の異動の内、当部関係は次のとおりである。

参考室長として岡雅彦助教授が研究情報部編集室長から配置換となった。また、浅井直子助手が整理閲覧室に採用された。整理閲覧室(閲覧係)の大石博昭事務官が参考室に、参考室の大倉加代子事務官が整理閲覧室(閲覧係)にそれぞれ配置換となった。

(整理閲覧部長)

共同研究

五三年度より実施の「酒田市立光丘文庫俳書解題」の研究は、五六年度をもって完結し、『共同研究報告2』として刊行される。最終段階において、地方俳壇史面よりする補注篇を付載することになり、その校正などのため、刊行が若干おくれたが、九月現在校了に近づいている。

五七年二月に開かれた共同研究委員会で、五七年度の共同研究テーマとして、

(1)「逸翁美術館蔵国文学資料」の解題研究

(2)「連歌資料のコンピュータ処理」の研究

(3)「平安時代の貴族社会と文学」の研究

の三課題が採択された(実施中の久松潜一氏寄託本の解題研究は、今年度は資料の関係で休むことになった)。新課題のうち、(1)は科学研究費による研究を引きつぐものであり、(3)は今年度客員教授として来館されるカリフォルニア大学バークレーのW・マカラ教授を中心とするものである。また、(2)については、当館としてはじめての試みとして、共同研究員を公募することとなり、その旨を館報十八号へはさみ込み、また『学術月報』4月号に掲載した。その結果は、十二名の応募者があり、六月十八日開催の本年度オ一回の共同研究委員会において、五名が選ばれた(別項共同研究員名簿参照)

なお、この委員会で、今年度の委員長に棚町知弥研究情報部長が選ばれた。

評議員会議の開催について

本年度オ一回評議員会議が七月十六日(金)に当館大会議室において、19名の評議員の出席を得て開催され石井良助氏が議長に、松尾聰氏が議長代理となった。議事は管理運営の概況、昭和58年度概算要求及び昭和57年度事業等について評議が行われた。なお、部会の構成は次のとおり

利用者へのお知らせ

◆索引誌(文献目録)案内
―雑誌論文を効率的にさがすために―

近年の、いわゆる雑誌論文の顕著な増加を反映し、このところ、カウンターにも、そのさがし方についての質問が目立っています。

論文数の激増は、それ自体で、また一面では発表誌の多様化を伴なっているだけに、必要な論文をさがす手間と時間だけでなく、それを見逃してしまうケースをも増やす結果になりがちです。従って、発表された論文を分野ごと、一定期間ごとに網羅的に集めた索引誌（文献目録）が不可欠となってきます。これらを使いこなすことこそ、必要な論文をもれなく、しかも効率的にさがし出す鍵といえます。

今回はそこで、国文学分野における索引誌（文献目録）類の代表的なものを二、三紹介してみます。

まず、当館が編集・刊行する『国文学年鑑』があります。当該年の1月から12月までの一年間に発表された論文が「雑誌紀要論文目録」として収録されています。論文名、執筆者、収載雑誌紀要名、発行月、巻号、ページ数が記載されています。一般論文とは別に、書評、紹介、総目次、解題及び新聞掲載の準論文も収録の対象となっています。巻末には執筆者索引も付されています。雑誌紀要論文の他「単行本解説」にかなりのページが割かれており、「翻刻複製作品一覧」や「学界展望」、「学界消息」等の記事も豊富で『国文学年鑑』にふさわしい内容となっています。

東大国語国文学会編『国語国文学研究文献目録』として昭和三十八年から出発し、昭和四十六年編集が当館に移って以来、二回の誌名変更をはさんで、現在、昭和五十五年分まで刊行されています。

本『年鑑』は、雑誌論文や単行書の検索と同時に、その年々の国文学界の全般的動向を俯瞰できる点に特色があります。

次に、国会図書館編『雑誌記事索引』があります。『索引』は「人文・社会編」、「科学技術編」、「医学・薬学編」に大きく分かれ、「人文・社会編」の十一分野のうち「文学・語学」の項に国文学関係論文が収録されています。

「人文・社会編」は昭和23年より月刊ペースで刊行が開始され、昭和五十二年以降は季刊となっています。他に著者索引（人名件名を含む）が年に一度、別冊で刊行されます。また、昭和二十三年から五十四年までの『索引』を累積、再編集し、時代、ジャンル別に細分、キーワードを付した『累積索引版』が、現在まで五期（五冊）にわたり刊行されています。

記載項目は、論文単位に一連の文献番号がついていることや収載誌上の論文のページが示されていることを除けば『国文学年鑑』と同様です。

本『索引』の特色は速報性にありますが、『累積索引版』によって遡及検索もできる点、使い方次第では便利な索引誌と言えましょう。

以上の他、昭和四十年より十年間を対象にした、日外アソシーツ編『日本文学研究文献要覧』、『私立大学・短期大学紀要類論文題目索引』等があります。

◆その他

次の五点が新たに貴重書に指定されました。

- 『心敬句集　苔莚』（写）
- 『連歌延徳抄』（写）
- 『洛陽名所集』（刊）
- 『連歌書(壁草)』（写）
- 『水鏡』（写）

決定した。

国文学研究資料館評議員会議部会別名簿

国文学部会

○△阿部秋生
△石井良助
伊地知鐵男
臼田甚五郎
小田切　進
加藤周一
久曾神　昇
△斎藤　正
佐藤喜代治
谷山　茂
野間光辰
◎△松尾　聰

史料部会

△阿部秋生
◎△石井良助
井上光貞
○児玉幸多
小葉田　淳
△斎藤　正
林　大
古島敏雄
宝月圭吾
△松尾　聰
松田智雄
山本達郎

◎印は部会長。○印は部会長代理。
（注）△印は両部会を兼ねる者。

委員会日誌

4月26日　国際日本文学研究集会委員会(第一回)
5月20日　国文学文献資料収集計画委員会(第一回)
5月25－26日　国文学文献資料調査員会議(総会)
6月18日　共同研究委員会(第一回)
7月9日　文献目録委員会(第一回)
8月25日　国際日本文学研究集会委員会(第二回)

昭和五十七年度秋季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学界の秋季大会予定は次のとおりである。掲出は五十音順。①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学界は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会①〒一七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内

近代語学会①〒一五四世田谷区太子堂一―七昭和女子大学内

国語学会①〒一〇一千代田区神田錦町三―一一武蔵野書院気付②一〇月二三～二四日③香川大学

古事記学会①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文化研究所第六研究室内

古代文学会①〒三五〇―〇二坂戸市石井二八七四―八三辰巳正明方

上代文学会①〒一五七世田谷区成城六―一―二〇成城大学文芸学部国文学研究室内

説話文学会①〒一一二文京区白山五―二八―二〇東洋大学文学部国文学研究室内②一一月二八日③常葉学園短期大学

全国大学国語国文学会①〒一〇二千代田区三番町二八―六　グラン三番町四〇五号　桜楓社気付②一〇月二三～二五日③洗足学園魚津短期大学

中古文学会①〒六六三西宮市池開町六―四六武庫川女子大学文学部国文学科清水研究室内②一〇月三〇～三一日③大阪市立大学

中世文学会①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文学第三研究室内②九月二三～二五日③大阪成蹊女子短期大学

日本演劇学会①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内②一〇月一六～一七日③甲南女子大学

日本歌謡学会①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文学第五研究室内②一〇月三〇～三一日③富山県高岡市青年の家

日本近世文学会①〒一〇三千代田区三番町一二大妻女子大学国文学研究室内②一〇月九～一一日③岩手大学

日本近代文学会①〒一七六練馬区豊玉上一―二六武蔵大学人文学部内②一〇月二三～二四日③日本女子大学

日本口承文芸学会①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文学第五研究室内

日本文学協会①〒一七〇豊島区南大塚二―一七―一〇②一〇月九～一〇日③神戸大学

日本文学風土学会①〒二一四川崎市多摩区東三田二―一―一専修大学文学部国文学研究室内②一一月二〇～二一日③専修大学神田校舎

日本文芸研究会①〒九八〇仙台市川内東北大学文学部内②一一月六日③東北大学

俳文学会①〒七九〇愛媛県松山市文京区三愛媛大学法文学部国文学研究室内②一〇月一六～一八日③松山市立子規記念博物館（愛媛県松山市道後公園）

表現学会①〒四八〇―一一愛知県愛知郡長久手町大字長湫愛知淑徳大学文学部国文学科研究室内

仏教文学会①〒一四一品川区大崎四―二―一六立正大学文学部国文学研究室内（東部）〒六〇三京都市北区紫野北花ノ坊町九六仏教大学高橋貞一研究室内（西部）

万葉学会①〒五六四吹田市山手町三―三―三五関西大学国文学研究室内

美夫君志会①〒四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一―二中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会①〒一〇一千代田区神田神保町三―二七共立女子大学四〇九国文研究室内②一〇月九～一〇日③共立女子大学

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料（切手）を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報　第十九号
昭和五十七年九月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―一六―一〇
郵便番号一四二
電話（七八五）七一三一（代）
印刷所　株式会社　三興